

**報告****天文教育フォーラム報告****～学会によるアウトリーチ支援の考え方～**

山根弘也（呉市かまがり天体観測館）

**1. はじめに**

日本天文学会との共催による天文教育フォーラムが、9月14日（月）17:00～18:30に2009年日本天文学会秋季年会において行われました。今回は「学会によるアウトリーチ支援の考え方」というテーマで、今や科学教育で一定の重みを持つようになったパブリックアウトリーチ活動について、現状を広く見直し、問題点を洗い出すことが目的とされました。アウトリーチ活動を行う上での立場の違いや異なる目標・意図を持つことを互いに認識し、アウトリーチ活動が多くの人にとって価値あるものにしていくためです。なお、フォーラムの参加者は約100名でした。

た、文化の一員としての科学の側面にも触れられ、中原中也記念館での取り組みを例に、文学者や芸術家との協力についての可能性も述べられました。

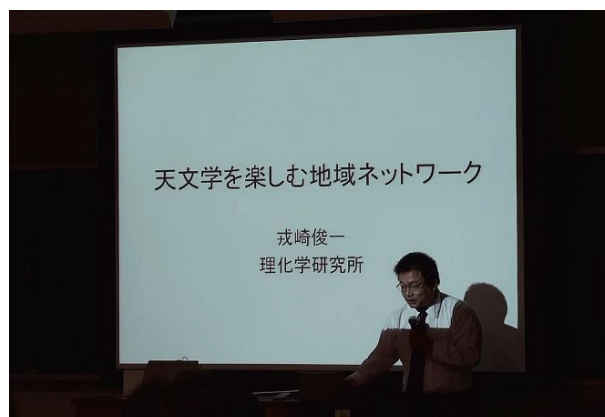


図1 発表の様子（戒崎俊一氏）  
（撮影：大西高司氏）

**2. フォーラム**

まず、最初に司会進行を務められた半田利弘氏（日本天文学会天文教育委員長・東京大学）から今回のフォーラムの趣旨説明があり、次に4名の話者提供者がそれぞれの立場から意見を述べられました。そして、最後に会場の参加者全員でディスカッションが行われました。

**2.1 自然科学研究者の立場から**

自然科学研究者の立場で、戒崎俊一氏（理化学研究所）から話者提供がありました。山口県を例に挙げ、博物館から小中学校に職員を派遣しての出前授業や小中学校の教員が博物館で長期研修を行う取り組みなどの天文教育の地域ネットワーク作りを紹介され、さらに、そこで行われる“科学教育の現場に科学者を”と現場と学会とのネットワークを構築することが重要であると述べられました。ま

**2.2 社会教育施設の立場から**

社会教育施設の立場で、黒田武彦氏（兵庫県立西はりま天文台公園）から話者提供がありました。社会教育施設からというよりも日本天文学会の現状について述べられ、日本天文学会が現在行っている講師派遣プロジェクトをもっと有効に活用してもらい、実りあるものにするためには恒久的な財源の確保が必要であることなどを挙げ、学会はもっと人的支援・財的支援に力を入れるべきであることを強調されました。

**2.3 学校教員の立場から**

学校教員の立場で、千頭一郎氏（鹿児島県立鹿屋高校）から話者提供がありました。鹿屋高校において実際に授業で使用されている画像等の教材を紹介され、画像を使用するに

あたっての著作権の問題、なかなか良い画像素材が見つからない、画像が良くても改変が出来ない等の苦労を述べられました。その上で、教員が授業の素材として使用するのに有用な画像コンテンツの提供を学会に要望されました。すでに完成している素材ではなく、著作権の問題をクリアした、コメント等の付け加えられていない（自分でコメントを加えられる）画像素材があれば良いということでした。

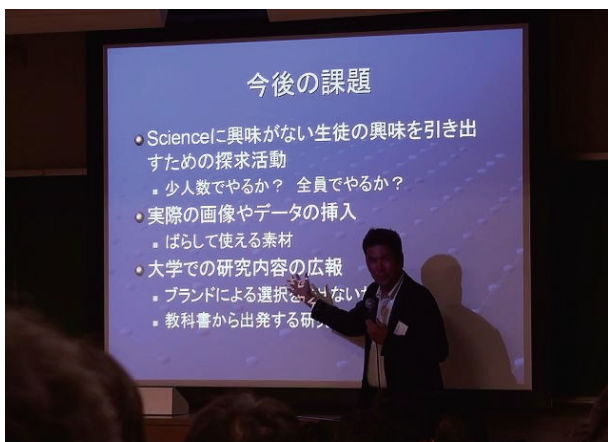


図2 発表の様子（千頭一郎氏）  
（撮影：大西高司氏）

## 2.4 他学会の状況

他学会からの立場で、原辰彦氏（日本地球惑星科学連合広報普及活動委員会副委員長・建築研究所）から話題提供がありました。日本地球惑星科学連合の場合の状況として、同連合でのアウトリーチ活動の取り組みや問題点等について述べられました。アウトリーチ活動で最も問題となっているのはマンパワー不足をどのように解決していくのか、アウトリーチ活動の評価をどのようにするのかということでした。

## 3. おわりに

4名の話者提供者の講演の後、ディスカッションが行われました。会場にいる参加者からは、講師派遣プロジェクトについて、学会での財源確保は可能であるのか、またその問題点は何なのか？という意見や画像素材の提供について、wiki方式を採用してはどうかという提案、公開天文台ネットワークが行っている画像提供データベースの拡張が良いのではないかという意見など、活発な意見交換がなされました。ディスカッションの時間が十分ではなかったように思えますが、今回のフォーラムをきっかけに、それぞれの立場について考え、より良いアウトリーチ活動を行っていただけるようにこれからも議論が深まればと思います。



図3 ディスカッションの様子。左から、半田氏、原氏、千頭氏、黒田氏、戎崎氏。  
（撮影：大西高司氏）

山根弘也